あるや否ハ考へねど忽ちあるこあるもの絶たる家ありそを継セ
ものゝ幸ひ甚〳〵とよびゝ小雲墓とゝのいくよ及ぶでうけ引て
こゝよまゝ七〳〵名を順昌と改めこれより時を経〳〵ひよ一家
を成〳〵その名高財よ言ふ〳〵

近松行重母

義士を松行重赤穂を退き者の好その母となるよ江戸ホ
来り横新よ寓居せしめをきあるうさ住ふて晨夕母のもと
よ行きて〳〵起居を問ふ後雖言のひと日前よあるうて母よ
告げて云案ホ主恩を受るれ源きをと大人の知る〳〵めん
こゝろあり義ホ於て赤穂よ死すべ〳〵を敢て死せざるを
世よ在り〳〵仇を殺〳〵〳〵先君の怨を報ちんとを謀るめく

今仇家たまく乗ずべきれ機ありこゝをもて衆議〳〵時ハ
失ふべ〳〵明教をもく〳〵死を一挙ホ決〳〵〳〵志を果さんと
を欲すされハ我ハ惜ひよ長〳〵ずたゞ大人を養ひまゐるする
りのあれバ母の憂を貽さんとを恐よ憂懼智よせまりう
て心非惆然うゝあれどもいやゝ〳〵を生を偷を上主恩よ
負きて父母の名を辱しめて忠孝の乃よ於て両ゝ失
ひよ者のびんや彩〳〵ハ大人やゝ〳〵長くゆさで自愛〳〵
まうんとを願ふとゝバ母の云我已よ老うゝ命旦暮よあり
幸ひよ孝子の節よ死し〳〵古人と名を斉〳〵世よ伝ふんを
を望てゝ喜びいたんゝゝ何で悲しむとゝあんゝ
恨らゝ〳〵ハ者やく我よ告げ知〳〵めぎれバ母やおゝ

かきをもちゐて平生の如くうるめよ物ひるとゐてとこそ
命じ給へ今悔やとも及ばじと嘆きるに行重云やく
大人ホこの事を少元まゐるゝセバ五子の上を哀ゝとゐつゝ
朝夕の歓をゝゐかきんとを物ひてあゝ告げざりゝとゝ
いバ母云汝が言もうゝありとゝ起ゝ一用よりゝが名ゝ
多待ども出で来ざれバ行重堪つゝ泣て往てゐるよ
母こゝゝゝ双よ伏ゝゝく傷よ遺書あり見まどうち驚きつゝ
その書をゐるよ云おゐゝゐハ母よこゝろのひゐれゝ義気
の振ハざるゝとおりへバ今吾先だち死ゝゝく汝が扶國の志
とまよせんとすつとめたげゝて銀よ物ゐとあゐれと銀よ
喻しゐるゐどホ行重その書とゐゝく慟哭むと大ゝさゝゝ

悔云我窮阨をゐて五ゐ年きあとの養ひかきをゐひたゐゝく
母よおゐゝゐるホ少て戚色ありといどゐるゝとハ扶ゝ
猶餘命のあり有ゝ自殺者のふとの悲よと子夜百ゝ嘆き
ゐゝゝつゝ図傳よ表の助けを請ひゝく家あゐよ奚事の
ゐりまゐ事ひ託するよゝ銀よゐき述べ有ゝびよ金若干を
封ゝ母の尸ゐゝゐゝゐホ亟きて扶をこあて去ゐゝとぞ
美成云室直清いふこゐ玉陵が母ゐ事とたゐて和
似ゐゐ有れども陵が母ハ死をして子の三子を勉
して創業の主よ殺せしめゐ扶りよこの母ゐ死を
もて生を換ゝゝ年侯の主恩よ報ハもるとゐの
陵が母よゐるとゐとゐゝ

浮世又兵衛

浮世又兵衛ハ摂津の大守荒木村重ノ子ナリ荒木村重
て織田信長公ニ仕ヘ軍功あるよりてその見事と〳〵
摂津國ニ封ぜ〳〵ル〳〵きその浮命ハ逆ひとあり〳〵自殺ニ伏
〳〵死セリその時又兵衛年ハ二歳の時ハて乳母ハ
ところハ抱ひそふ医ハ〳〵本預ル此場中ニ通れ居り浮
長と称ス及び〳〵母の氏を冒し〳〵岩佐氏を称すなて
父の縁故をもて織田信雄ニ仕ヘ幼より畫を好こ風流
新撰ハ時勢粧をうつ〳〵て人あを名ゲ遂ニその妙ニ
いよ〳〵一家の風を成り〳〵てその世を去ることいと久
〳〵志れ難たく〳〵その表蹟を伝ふるもナしとも落款名

印あるものなり〜おのゝ自由ぐ〜ところいろ〜に縫ちぐ時流を
まと〜つとめ〜新様はよりてを慕ひ〜やうれば時人諱
名〜く浮世又三郎と呼ぐ〜〜世は又平と称ぐ〜
美成云山東庵が浮世絵類考の追加は幸翁久鑑は
浮世又三郎大津絵の元祖〜ありこの説あまねく人
口に流れども〜ある記録に古浄瑠璃傾城
反魂香は土佐の赤子浮世又平重興とつゞめ大
津は俗〜絵を〜〜を紙にかこれり〜〜ま
す〜虚説を伝ふ説は別人は大津又平とつゞ
めのありてうきさぐ〜むとも〜〜真保の頃やまで雲
子孫あり〜〜と云ふ〜が大津の古画奴の稿を拾ら

図を蔵す落款は八十八歳又平久吉とうきく
花押ありて古雅なるものなり彼又平が子孫の
絵はやはり真宗四年ふ紙に猿日記とつゞ冊子ふ
大津追分やつこ稿料のいきをひ仕子き絵をうる大
谷といふとあり稿料の絵もやうきものとなりやさて
大津絵〜浮世絵とハ類〜ろ浮世又三郎ごとを
辨ぜんぐるあるこれを記すと云ふ

菱川吉三郎

菱川吉三郎師宣八房州保田村の産なり父を吉左衛門
茂信剃髪〜〜といひ〜〜世〜縫箔を業とせり吉左衛門と
まるの技は精妙をきはめるるの子吉三郎師宣の縫箔

世々名をくんたゝめよとて毒を学びしゝが生来絵事をこのゝ土佐氏の画風を右ひ浮世又ゝ傍ら筆耕よ徴ひて遂よ一家をなしゝ名世よ空ゝ高歌小自大和絵師あるひ八日本絵師と称せり年いまゞ弱うしゝころ江戸よ移り住めり婚よ剃髪しゝ友弁と号す年十歳ゝて正徳年間ゝまりぬゝ吉ゝ傍橘町よ住ゝ浪その家よ性質いと怠惰なる小童あり常よ事をあやまるもの多ゝしゝある年の七月十三日の夕ゝまよの小童よあふせて門口よ迎火を焼せるよあゝゝ生入りて精霊様ゝ出ていふよ吉ゝ傍おどろひつゝまゝ何をいふゞ精霊様ゝ出るものゝ地ゝあるものとあゝれとさゝゝるゝ小童いふ

せよあゝゞ白き衣被よて自精霊彩幽霊と名のりて又ゝるゝ吉ゝ傍云彩号のある幽霊こそめづらゝれとて出て見ゝよつゝゝ仏ゝの友ある俳人吉弁ゝ志ゝ子北松彩彩ゝ玄栄といゝる人白地の浴衣よて訪らひ来れるあゝ倒の小童ゝ見ぎこゝ地ゝれとて互よお笑ひゝこの時北吉ゝ傍ゝ狂ゝよ

何といふれいの魔おゝる又いゞゝ高やうゝれんのなきゝけ若美成云世よ名高き英一楽とこの吉ゝ傍とハ時世をあるゞく高ゝ一楽より十年ゝ先ゝちく世小安元寿おこゝるさて一楽ゝ四季絵の路よゝゝ星ゝ時あゞゝ何ゝかこのよゝゞよ逢ひ時雨朝ゞ

のまぢかきをいとたぎるこころひ岩佐蔓川が上たらんとを思ひてとゝいふても名人の一様さへ蔓川氏が畫風をバ仰慕るを思ひつゝまゝ俳書こゝかし栗の句より

山城北吉弥却すびを松まこゝろ　其角

蔓川やうの五素おもろけ　嵐雪

この二書をたやゝく浮世繪類考に引くこの注さるまゝおこゝかゝれるを見るべしとの了印行まておこゝかたゝゝ繪本より和國百女月次あそび恵のこゝかうこゝこの外人和花雪おいと多くう他邦の人江戸繪と称して印抜の繪を書敷すること蔓川氏を嘱矣と

す印抜の一枚繪ハふるくあり〳〵とのあれど彩色〳〵たゝふ手くて自事のこゝろよりやゝくまいるどりたるものいで来〳〵を明和の初鈴木春信たゞあるく色ずりの豫繪とのふものを工夫してより今まあるくいろんより出こゝかゝれて江戸北名物こゝう他邦のあてるべこゝろまあゝべきれども春信生涯こゝ家妓役者を画ゝすこの浮勝川春章役者のお拵せ〳〵肖像を名ゞ名人まてこゝの役者北豫繪ハ実ふこの人またゞ出れりこゝハ関まいさゝいふのこ

王葛陂

王葛陂名ハ道昂字ハ伯起雪先ハ明の郷琊北人あり

崇禎中より兵乱を避て也邦より投化し〻く世〻摂の大坂ふ
住めり姚ハ木村氏の女にして平氏の宗臣長門守重成の耳
孫なり享保甲辰七月二日大津の廛外茅ヶ崎の西涯より
出る祖父涼翁より養ひ孔涼翁医術を善するをもて或
侯に仕ふ侯に従ひて〻く肇都江戸に徙る葛陂もまたこと
ふ来れり居ること三年ありて涼翁病因によりて身を乞葛
陂と倶に下総の葛飾に隠れ住めり涼翁没するに及び
も命を僻て就ず毋木村氏うゝく才行をもて学えう
つねゝをしへ誡めゝいるハ汝世人に従ひて熟するをあれ
ヨル汝ら尋常に勝れんをを形ふといふうゝく石筑波ふ
呼事し〻先学成りて復葛飾に還りすゝめ従学の徒遂

に葛陂を以て号とす延享年諸國を経歴してその山川名勝
を探り変ずるゝ〻〻安永丙申八月八日没す
享年五十三歳華頂山佛光寺に葬る門人謚して廉明
先生といふ

狩野山樂

狩野山樂ハ江國蒲生郡の人なり本氏木村名ハ光頼
小名平三といふ木村永光の子なり永光たゞめ浅井氏
ふ事へ仕ふ豊臣太閤に謁しゝくを待ち士うち太閤城
郭を営造するにあたりて監臨しゝ時光頼幼年
ふゝ〻太閤の杖を持ゝく仕ふ移ひ行きるの杖まて御上
に馬の轡をとりきてあるうの人ハ見るをもうらやゝ

ゝぶ太閤元のひ元ゝずゝゝて云ゝ汝画を好めりと却も
ちゝゝてゝゝの頃画立ゝ長ゝる狩野永徳ゝ倩ゝゝゝゝ
学ばしめ後ゝ命を下ゝ父子の契約をかゝゝめ狩野氏を
冒ゝ修理亮と称す用業の法ゝ於ゝ正信を得ゝゝゝゝゝゝ
も狩士林の列ゝ接ゝゝゝ勤仕ゝと繁ゝゝ太閤ゝゝく東福
ゞを修ゝ営ゝゝゝゝ法堂の天井ゝ傳明兆雲龍を畫ゝるあり
これゝゝ前ゝ雷火ゝ逢て損せゝゝゝ太閤狩野永徳をゝて
補ゝゝむゝゝ雲ゝを画きていまゞ龍を名ゞゝゝゝゝ永徳ゝハ
ゝゝ病ゝゝゝてゝゝ危急ゝゝゝゝゝゝ

元亨〜て禅林の法華の天井に必幡龍を画かんと云
太閤秀吉天王寺を修造し給ふ時も光教を〜くそゞめて
聖徳太子縁起を堂壁に画しむ〜て唐土の蕚玄の好も
猶大坂に有〜しゞ年を〜く男山の瀧本坊の許に寓居〜
剃髪〜〜山樂と汲め称せり洛中の金殿玉楼をかゝ
その墨痕を存するもの多〜と小龍虎鷹馬に多〜く八頗
書畫に秘あり秀吉平生好て殊に亜々り病老に元
を求めて果〜て遯邪の霊験ありと云寛永乙亥八月
丁巳の日病をもく終れり時年七十七歳

名家畧傳巻之三 本錠

名家畧傳

281
4